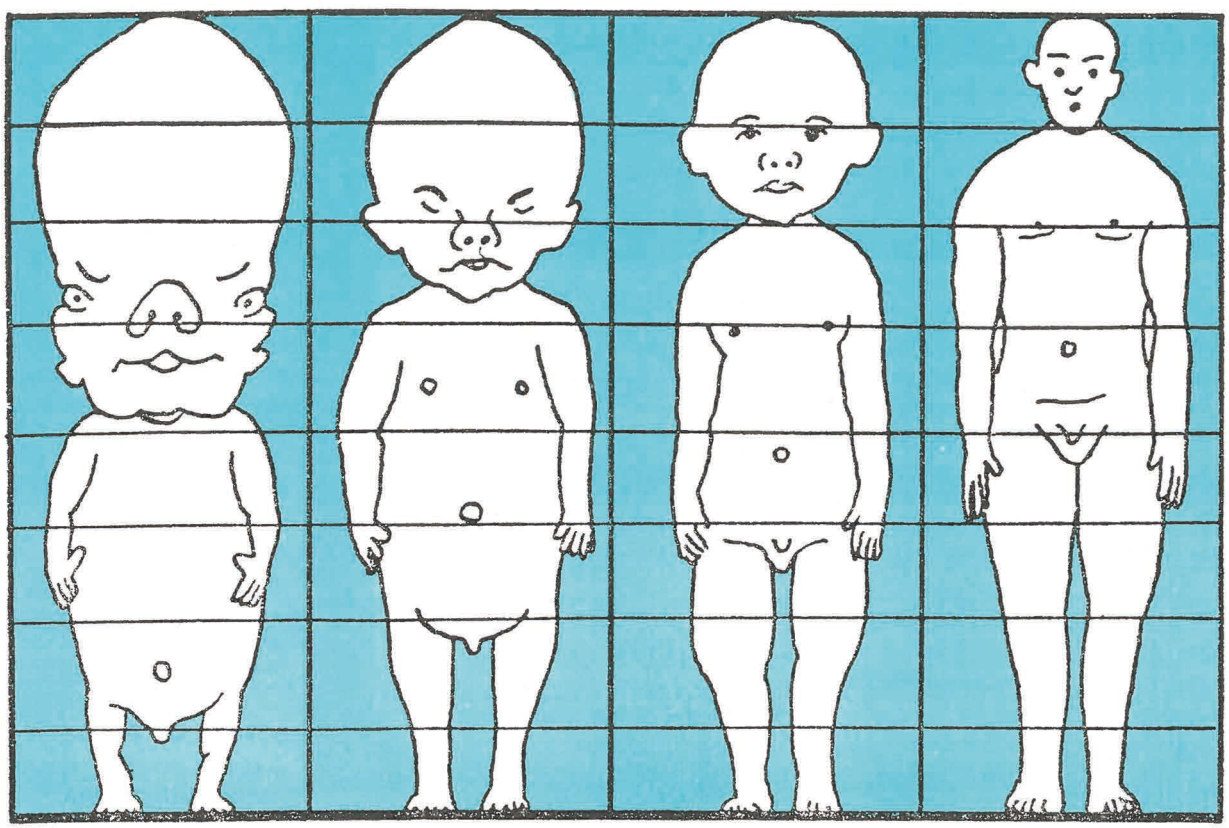
歴史なき「子ども学」の恣意性を克服し、
研究の実践的不毛性を打開していくのに不可欠な基本資料。
教育学・社会学・児童福祉・児童心理等の研究者必備の書。

日本の子ども研究

—明治・大正・昭和—

全Ⅲ期15巻別巻5〔第Ⅲ期刊行開始〕

大泉　溥 編・解説



クレス出版

第Ⅲ期（1960～70年代）の刊行にあたって

日本福祉大学特任教授
大　泉　　溥

近年は“子ども学ブーム”だといわれる。確かに、そうした本の出版や関係雑誌の特集が相次ぎ、また「子ども学」ないしは「発達臨床」などの学部や学科をもつ大学・短大が100校を超えている。その背景には急激な少子・高齢化の進行に対する子育て支援などの政策展開とそれを担うべき教師・保育士・児童指導員など大量定年退職による人材不足で後継者養成が急増したことがある。さらに重要なことは経済のグローバル化と未曽有の世界的不況のもとで“子どもの貧困”“子どもの危機”（虐待・いじめ・不登校、無気力・無関心、自殺など）への社会的関心が高まり、これにとりくむ人たちの懸命な努力が拡がり、一層複雑化した事態への実践的探究がなされざるをえない点であろう。

最近出版された「子ども学」書を上記のような見地から見てみると、それぞれの専門における研究動向をふまえて子どもの特質と実際的対応について論述したテキスト・参考書であって、「個別支援計画」のようなマニュアル的具体化の傾向が強まり、子どもの悲惨と対峙する実践者を支え勇気づけた近代日本の子ども研究の存在など学史的事実にはほとんど無関心なようである。子どもの文化や生活史（児童問題史）の本も若干はあるけれども、子どもの実態の歴史的変遷と子ども研究の方法論的反省とは同じではない。子どもの発達を問題とする子ども学が自らの研究の来歴、学的発達の論理を自覚化しようとしていないのは、何とも奇妙である。そもそも、“児童研究のブーム”は明治以来、幾度も繰り返されてきたものなのであって、それらの顛末から子ども研究に不可欠な教訓を引き出し共有可能なものとすべきだと考える。

このような課題意識のもとに第Ⅰ期と第Ⅱ期につづくものとして、今回の第Ⅲ期では1960年代から70年代のところを問題とした。つまり、第Ⅲ期は近代の児童研究の研究成果の蓄積を形式的に総括する域をどう脱却し（輸入科学からの脱皮）、冷戦構造の崩壊という時代社会の中で“新しい子ども学”へ志向がいかにして芽生え、どんな模索と試練があったのか。そこでは、変えるべきものと変えてはならぬものの区別が大事な意味をもち、保守と革新といったイデオロギー的判断に依拠したことの反省をふくめて、子ども研究における科学性と実践性が問われている。

この復刻叢書は、歴史なき「子ども学」の恣意性を克服し、科学の実践的不毛性を打開するのに不可欠な古典や基本資料を「明治・大正・昭和」の100年間の中から抽出し、それぞれの時代的特質を見極め、研究者の育ちと試練・志向性を学びうるように編集した。これらは総じて、現実問題に向き合う実践と切り結ぶ学問のあり方とその研究主体の形成を問うものである。「虎は死んで皮を残し、人は死んで名を残す」といわれるが、それよりさらに意義のある「後世への最大の遺物」を“子ども学”の分野で明日へと引き継ぐことを企図した学史的な事業である。

日本の子ども研究
—明治・大正・昭和—
全巻構成

第Ⅰ期 子ども理解の科学化 —明治・大正期を中心に—

第１巻　欧米児童研究の移植と初期の研究

三島　通良『就学年齢問題』 文部省 1902
教育研究所『児童研究法』 右文館　1900
高島平三郎「我国に於ける児童研究の発達」1898
（付）「大日本教育会児童研究組合報告」1895
中島泰蔵の子ども研究（初期論文）
「児童心意 実験之結果」(1895)、「心意発達之理」(1895)、「応用心理学の性質及其基礎」(1896)、「不健全の心的徴候」(1895)
元良勇次郎の子ども研究（主要論文）
「心理と教育との関係」(1889)、「児童の心情研究に就て」(1895)、「小児心理学」(1897､98)､「児童心理」(1900)「注意作用の研究」(1900)､「注意練習ノ実験ニ就テ」(1909)、「低能児研究と其の教育」(1908)、「低能児分級教授の可否」(1908)、「児童の自我観念」(1911)、「精神療法に就て」(1910)
故元良博士追悼学術講演会編『元良博士と現代の心理学』 弘道館　1913

第２巻　児童観の進展と心理学への期待

上野　陽一『児童心理学精義』 中文館書店 1921
福富　一郎『注意と学習の心理及び其の実験的研究』 金港堂書籍　1920

第３巻　発達研究の開拓と知能検査の翻案

石川　貞吉『生後一年間ニ於ケル 一児童発育ノ観察』 児童書院　1915
榊　保三郎『学齢より丁年までの精神発育研究』 改造社　1922
久保　良英『愛児良毅の教養』（一部省略）中文館書店　1928
久保　良英「幼児の言語の発達」1922
久保　良英「小学児童の知能査定の研究」1918
（付）三宅鉱一・池田隆徳「知力測定法」1908
古賀　行義『知能相関の研究』心理学研究会　1918

第４巻　大正新教育と学力評価

塚原　政次『児童の心理及教育』 明治図書　1926
青木誠四郎『学業成績の研究』 先進社　1929
（付）青木誠四郎「知能による学習成立の限界について」1943
下中弥三郎「実験心理応用の限界と教育」1925
大伴　　茂『新教育の展望』野村教育研究所　1929
大伴　　茂『かくの如く児童を理解する』野村教育研究所　1928

別巻Ⅰ　近代日本の児童相談

安田生命社会事業団『日本の児童相談　明治・大正から昭和へ』 川島書店　1969
安田生命社会事業団『日本の児童相談　続 戦後 25 年の歩み』 川島書店　1970
（付）「日本児童学会沿革」1941 ～ 1944
（付）山下俊郎「内外児童教育相談事業の発達」1937
（付）「教育相談所と心理学」1939
（付）大迫政秀「新しい教育相談施設の現況」1971
（付）沢田慶輔・増田幸一ほか「ガイダンス」、村上俊亮「教育研究所」1954

第Ⅱ期　子ども理解の拡がりと試練

第５巻　昭和初期の心理学と実践

加藤　正英『－幼児保育の基礎としての－　児童心理学』 保育研究会　1935
山下　俊郎『幼児心理学』 巌松堂書店　1938
藤本　喜八『青少年工の心理と指導』 東洋書館　1943

第６巻　一九三〇年代日本の児童研究

小野島右左雄『性格心理学と児童研究』 中文館書店　1933
波多野完治『児童社会心理学』 同文館　1938
依田　　新『児童観と児童研究』 巌松堂書店　1940
一九三〇年代日本の児童学論争
第一部　『教材と児童学研究』誌上での論争
第二部　一九三〇年代日本の児童学研究に関する主要論文

第７巻　留岡清男の子ども研究と生活教育論

留岡　清男『教育農場五十年』 岩波書店　1964
留岡　清男『国民運動と国民教育者』 同盟通信社出版部　1942
大泉　溥編『留岡清男著作集　－子ども研究と生活教育論の展開－』
第Ⅰ部　価値心理学の研究　－文献紹介・解説評論・実験研究－
第Ⅱ部　児童問題と家庭学校
第Ⅲ部　戦前の教育科学論
第Ⅳ部　戦後の教育科学論と教護問題
第Ⅴ部　人と作品
第Ⅵ部　参　　考
留岡清男年譜

第８巻　奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論

大泉　溥編（市澤豊編集協力）『奥田三郎著作集　－子ども研究と治療教育学の展開－』
第Ⅰ部　戦前の心理学・精神医学
第Ⅱ部　戦前・戦中の知的発達障害児処遇論
第Ⅲ部　戦後の心理学・精神衛生と特殊教育
第Ⅳ部　通信教育テキスト
第Ⅴ部　北大幼稚園の関係資料と『北大教育学部特殊教育研究会ニュース』より
第Ⅵ部　留岡清男と家庭学校のこと
第Ⅶ部　小金井学園の関係資料
『小金井学園日誌』『重症児S君の記録』など1935 ～ 1944
小金井学園『治療教育』第１、２輯　1936、1938
奥田三郎年譜（市澤豊作成）

第９巻　児童心理学の戦中と戦後

阪本　一郎『少国民錬成の心理』 新光閣　1943
守屋　光雄『乳幼児心理学』 内外出版印刷株式会社出版部　1944
守屋　光雄『児童心理学研究』 印書館　1945
波多野完治『三訂　児童心理学』 同文館　1947

第10巻　戦後児童心理学の再出発

上武　正二『新発達心理学』 金子書房　1951
乾　　孝『児童心理学』 新評論社　1954
鈴木治太郎『知能測定尺度の客観的根拠（改訂版）』 東洋図書　1957
関　　計夫『劣等感の心理』 牧書店　1954
津留　　宏『家族の心理』 金子書房　1953

別巻Ⅱ　戦後の教育心理学の起点

牛島義友・波多野完治編『教育心理学研究』全４冊　巌松堂書店　1949～51
第１集　児童の心性と能力検査　　第２集　性格と社会性の検査
第３集　児童の興味と適性検査　　第４集　臨床心理学とガイダンス
小林さえ子『孤独・友情・社会　社会生活の心理』 医学書院　1951

別巻Ⅲ　児童心理学の総括

波多野完治・依田新編『児童心理学ハンドブック』 金子書房　1959
（付）波多野完治「心理学ブームと心理学批判」「総論・歴史・理論」 1962
青年心理学研究会編『わが国における青年心理学の発展』 金子書房　1973

第Ⅲ期　子ども理解の深まりと新しい実践性の獲得へ

第11巻　障害児実態調査の戦前と戦後

文部省普通学務局『特殊児童保護教育に関する調査』 同省　1921
富士川　游『異常児童調査』 広島修養院　1927
富士川　游『異常児童性格研究』 広島修養院　1930
滝乃川学園『東京府（代用）児童研究所報告』 滝乃川学園　1933
京都市児童院『教育調査の結果に就きて』 同児童院発行　1937
大阪市教育部『大阪市に於ける学業不進児の調査』 同教育部　1939
東京市役所『補助学級児童ノ卒業後ノ状況』 同市役所発行　1937
吉益脩夫・村松常雄「昭和12年度東京市不就学児童の精神医学的調査」 1939
吉益脩夫・村松常雄 「東京帝国大学医学部脳研究室児童研究部に於ける異常児童500例に就きての精神医学的研究」（付、東大脳研究室児童研究部開設以前10年間に於ける東大精神科外来患者中15歳以下の児童に就きての臨床的統計的考察） 1940
村松常雄ほか「精神薄弱者の社会的予後」 1943
木野　孝雄「特殊学級卒業生転校生の状況」 1956
糸賀一雄ほか『精神薄弱児の社会的予後』（謄写印刷） 近江学園　1955
樋口幸吉「精神薄弱の非行と再犯予後の研究」 1958
精神薄弱児実態調査委員会編『精神薄弱児の実態』 東京大学出版会　1956
厚生省児童局監修『精神薄弱児の実態と保護指導の基礎資料』 同局　1961

第12巻　戦後の児童学と「日本の子ども」という視座

小川　太郎『日本の子ども』（教育文庫） 金子書房　1952
松村康平ほか『児童学　－児童理解の基礎－』 誠信書房　1956
平井　信義『児童学入門』 光生館　1975
国民教育研究所編『日本の幼児』（全書国民教育9） 明治図書出版　1968
一番ケ瀬康子ほか『子どもの生活圏』 日本放送出版協会　1969

別巻Ⅳ　城戸幡太郎と日本の教育心理学

城戸幡太郎『現代心理学　－その問題史的考察－』 評論社　1950
城戸幡太郎『心理学と教育』 国土社　1958
城戸幡太郎『教育心理学への反省と期待』 教育出版　1981
（付録）城戸幡太郎「児童に於ける特殊なる知能の構造」 1926
城戸幡太郎『教育科学七十年』 北海道大学図書刊行会　1978
城戸先生古稀記念祝賀会実行委員会『現代教育と創造性の開発』 同委員会　1964

第13巻　田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成

田中　昌人『人間発達の科学』 青木書店　1980
大泉　溥編『田中昌人の初期著作』
第Ⅰ部　近江学園研究部のこと
第Ⅱ部　発達過程の研究と思索
第Ⅲ部　障害児指導への寄与と提案　—実践の理論的再構成に向けて—
第Ⅳ部　障害者の社会適応
第Ⅴ部　障害者問題と研究運動
参考資料と年譜
収録文献の出所一覧

第14巻　新しい子ども研究への胎動

園原　太郎『子どもの心と発達』 岩波書店　1979
藤永　　保『幼児の心理と教育』 フレーベル館　1967
三宅　和夫『児童発達心理学　増補版』 川島書店　1975
津守　　眞『子ども学のはじまり』 フレーベル館　1979
詫摩　武俊『伸びてゆく子どもたち　幼児期の家庭教育』 中央公論社　1985

第15巻　調査・研究の方法論的深化と実践性の獲得へ

田中　杉恵『発達診断と大津方式』 青木書店　1990
吉田　章宏『授業を研究するまえに』 明治図書出版　1977
大泉　　溥『障害者の生活と教育』 民衆社　1981
大阪府労働部『精神薄弱者職場適応の検討』労働省職業安定局　1968

別巻Ⅴ　日本の心理学者と子ども研究

松本亦太郎『遊学行路の記』 第一公論社　1939
野上俊夫先生記念録編纂世話人会（京大文学部心理学研究室）『野上俊夫先生記念録』 1965
山下　俊郎「私の歩いてきた道」1980
波多野勤子『妻として母として女として』 小学館　1979
第20回日本教育心理学会総会「歴史と展望」 1980

Ⅰ 緒言

近年精神薄弱者に対する社会的関心が高まりつつあるが、尚、教育学、心理学医学等の分野に於て解決されなければならない数多くの問題が残されている。

個々の児童についてその発達過程を精神的、身体的に詳かにした研究は皆無に近く、成人後に於ける彼等の一般社会に於ける実態の調査すら一、二を数えるに過ぎない。

これ等の問題は単に精神薄弱者の処遇の問題に直接関聯するのみでなく、教育心理、医学を通じての基礎的な研究課題でもあり、更にその研究は彼等の具体的な処遇の問題に光明を与える所大であろう。

今回我々は、滋賀県に於て昭和23年に施行した全学童の知能テストの結果発見された精神薄弱児が、義務教育終了後一般社会に於て如何なる状態にあるかを調査する機会を得た。

この調査に於て特に精神薄弱者の生活の場に於ける人間関係を中心としてその実態を明らかにし、社会的適応の状態を現象的に類型化し、更に生育史及び環境の面から、その適応様のうつりかわりの過程を分析し、移行の誘因に関する検討を加えることができたと考え、ここに基礎的な資料の一つとして上梓する次第である。

Ⅱ 調査の対象

昭和23年12月、滋賀県立中央児童相談所が主体となり、県下小学校4年以上及び中学校生徒の殆んど全員に対して田中式知能テストを施行した。その結果知能指数70以下の生徒1409名となったので、この全員を調査の対象とした。従ってこの中には不就学児童、精神薄弱児施設収容児童は含まれていない。

Ⅲ 調査の方法

イ、調査表　　第1表～第8表参照

第1頁　一般的記録

第2頁・3頁　家庭の人のみに現在及び在学当時の適応状態

第4頁・5頁　学校教官のみに在学当時の適応状態

第6頁・7頁　職場の人のみに現在の適応状態

第8頁　調査員が本人に面接して得た現在及び在学当時の適応状態

第11巻『精神薄弱児の社会的予後』1955

子どもと歴史

第一章　子どもと歴史

一　子どもの歴史

多くの歴史が書かれているけれども、そのほとんど全部はおとなの歴史である。歴史が特権階級の歴史であってはならないということは、今日では常識になっていて、人民の歴史が書かれるようになったばかりでなく、とくに婦人の生活を中心にした歴史もいくつか書かれている。けれども、子どもの生活の歴史的な変遷を書き記した歴史となると、無に近いというのが現状である。むろん教育史は子どもの生活にふれてはいるけれども、それは子どもが教育される仕方とその場面について述べるにとどまっているし、また童謡や遊びを中心にした子どもの歴史は、童心への郷愁の立場から書かれているにすぎない。それらはそれぞれ子どもの生活の一面にふれており、貴重な資料ではあるけれども、子どもが生まれ育つ社会で、子どもがどのような地位におかれ、どのような取扱いを受けていたか

第12巻『日本の子ども』1952

第15巻『精神薄弱者職場適応の検討』(1967)

表22　対象者に対する雇用主の当初の期待，目標と現状ならびに将来の見通し。

対象者	勤続年数	操作特性	当初の期待・目標	現状	将来の見通し
K.A	8.10	2次元形成期	ちょっとした下働きができればよい。	いつもニコニコしていていいつけられたことはきちんとするので満足。	現状維持 一生面倒みるつもり。
T.S	9.10	〃	賃金分のねうちがあればよい。 (日給200円～300円)	いなければならない人になっている。	これ以上望めない。 今の仕事をつづけてもらうつもり。
N.S	3.6	2次元可逆操作期	大した仕事をしてもらおうとは思わない。	いいつけておけば誰もいなくても1人で根気よくやっている。	少しでも多くのことを覚えさせてやりたいと思っている。責任をもってみてやる。
W.T	8.8	〃	おとなしくて無口がとり得といわれ，そのつもりで雇った。	3年まではよかったが，その後いうことをきかなくて困っている。	これ以上むり。人手があって彼女の就職先があればやめさせたい。
Y.S	9.8	〃	子守さえできればよい。	子守は子供を背中にくくりつけて1日外で遊ばせておいて何とかできた。その後子守は必要ないが引き続き手伝わせている。	これ以上無理だが家族の一員としてやってもらうつもり。
I.K	9.9	〃	人間成長を期待。 仕事についてはあまり期待せず。	よくやっている。	人間的成長に期待。 仕事は変えない方針。
A.H	0.3	3次元形成期	雑役でもできて人手不足を補ってくれればよい。	まあまあといったところ。	これ以上は無理。
M.J	0.5	〃	単純な仕事なのでくりかえせば一般並にできるだろう。	期待はずれ。なかなか上達しない。	現状維持。期待できず。
H.K	0.7	〃	一般の半分できればよい。	今はまだ一般の40%位	もう少し伸びそう。
H.A	1..4	〃	雑役ができればよい。	満足している。	現状維持。
I.E	1.7	〃	実習のとき以上を期待。	あまり上達しない。	期待できず。
I.M	1.7	〃	〃	案外上達しない。	現状維持。
I.S	2.0	〃	入院の合間に手伝えばよい。 しかしあまり期待せず。	いいつけられたことはどうにかできるようになった。	〃
Y.H	5.2	〃	期待せず(遊ばせておいても仕方がないからできるものをやらせた)	十分成長した。よかった。	つづけさせたい。 一般者に近づけるようにしたい。
N.H	5.11	〃	未知数，補助さえできればよい。	12,000円の給料で採算がとれるようになった。	あと2,000～3,000円はアップできるようにに。もう少しは伸びる。
T.T	10.10	〃	少し間にあえばよい。	よかった。特定の人の云うことしかきかないのが欠点。	仕事はこれ以上むり。ただしよい指導者でもいればよい。
S.A	13.3	〃	雑役ができればよい。	雑役だが1人で段取りもでき，よく伸びた。	注意されなくても1人で今の仕事ができるようになる。
I.Y	0.2	3次元可逆操作期	一般の半分できればよい。	まだ期間が短いので一般の20%程度しかできない。	H.K(事例9)より伸びそうである。

日本の子ども研究 —明治・大正・昭和—

全Ⅲ期15巻別巻5　大泉　溥 編・解説　A5判・上製クロス装・函入り

●第Ⅰ期　子ども理解の科学化　—明治・大正期を中心に—〔既刊〕ISBN978-4-87733-476-5（セット）
第1巻　欧米児童研究の移植と初期の研究　定価19,000円（税別）　ISBN978-4-87733-471-0
第2巻　児童観の進展と心理学への期待　定価22,000円（税別）　ISBN978-4-87733-472-7
第3巻　発達研究の開拓と知能検査の翻案　定価22,000円（税別）　ISBN978-4-87733-473-4
第4巻　大正新教育と学力評価　定価19,000円（税別）　ISBN978-4-87733-474-1
別巻Ⅰ　近代日本の児童相談　定価13,000円（税別）　ISBN978-4-87733-475-8
■第一回配本　第1巻～第4巻、別巻Ⅰ　全5巻　揃定価95,000円（税別）

●第Ⅱ期　子ども理解の拡がりと試練（一）〔既刊〕ISBN978-4-87733-481-9（セット）
第5巻　昭和初期の心理学と実践　定価22,000円（税別）　ISBN978-4-87733-477-2
第6巻　一九三〇年代日本の児童研究　定価20,000円（税別）　ISBN978-4-87733-478-9
第7巻　留岡清男の子ども研究と生活教育論　定価20,000円（税別）　ISBN978-4-87733-479-6
第8巻　奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論　定価20,000円（税別）　ISBN978-4-87733-480-2
■第二回配本　第5巻～第8巻　全4巻　揃定価82,000円（税別）

●第Ⅱ期　子ども理解の拡がりと試練（二）〔既刊〕ISBN978-4-87733-486-4（セット）
第9巻　児童心理学の戦中と戦後　定価26,000円（税別）　ISBN978-4-87733-482-6
第10巻　戦後児童心理学の再出発　定価25,000円（税別）　ISBN978-4-87733-483-3
別巻Ⅱ　戦後の教育心理学の起点　定価21,000円（税別）　ISBN978-4-87733-484-0
別巻Ⅲ　児童心理学の総括　定価23,000円（税別）　ISBN978-4-87733-485-7
■第三回配本　第9巻、第10巻、別巻Ⅱ、Ⅲ　全4巻　揃定価95,000円（税別）

●第Ⅲ期　子ども理解の深まりと新しい実践性の獲得へ（一）　ISBN978-4-87733-555-7（セット）
第11巻　障害児実態調査の戦前と戦後　定価26,000円（税別）　ISBN978-4-87733-552-6
第12巻　戦後の児童学と「日本の子ども」という視座　定価26,000円（税別）　ISBN978-4-87733-553-3
別巻Ⅳ　城戸幡太郎と日本の教育心理学　定価26,000円（税別）　ISBN978-4-87733-554-0
■第四回配本　第11巻、第12巻、別巻Ⅳ　全3巻　揃定価78,000円（税別）　2010年10月刊行

●第Ⅲ期　子ども理解の深まりと新しい実践性の獲得へ（二）　ISBN978-4-87733-560-1（セット）
第13巻　田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成　定価25,000円（税別）　ISBN978-4-87733-556-4
第14巻　新しい子ども研究への胎動　定価26,000円（税別）　ISBN978-4-87733-557-1
第15巻　調査・研究の方法論的深化と実践性の獲得へ　定価22,000円（税別）　ISBN978-4-87733-558-8
別巻Ⅴ　日本の心理学者と子ども研究　定価22,000円（税別）　ISBN978-4-87733-559-5
■第五回配本　第13巻～第15巻、別巻Ⅴ　全4巻　揃定価95,000円（税別）　2011年2月刊行
■第六回配本　解説　定価5,000円（税別）　2011年秋刊行予定　ISBN978-4-87733-487-1

牛島義友著作選集

安藤　延男 監修

教育心理学の研究や教育、実践活動などが
産出した膨大な著書や論文を集成。

第一巻　幼児保育・要支援児教育　定価15,000円（税別）　ISBN978-4-87733-525-0
第二巻　女子・家族　定価17,000円（税別）　ISBN978-4-87733-526-7
第三巻　教育・人間形成　定価17,000円（税別）　ISBN978-4-87733-527-4
第四巻　青少年（一）　定価17,000円（税別）　ISBN978-4-87733-528-1
第五巻　青少年（二）　定価16,000円（税別）　ISBN978-4-87733-529-8
全五巻　揃定価82,000円（税別）　ISBN978-4-87733-530-4（セット）

〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町14-5　メローナ日本橋
☎03-3808-1821　FAX03-3808-1822　http://www.kress-jp.com/
株式会社クレス出版

●書店名